古今夷曲集（寛文六年 五月）

古今夷曲集序

四角柱やかとらしや角のないこそそひよけれむかし〳〵いふにいへぬ物の中より丸きものゝ一つおいて二つになり三つになりし時より夷曲哥は始れりけり今狂哥といふなるへし哥は人の心を種としてことのは茂りそふものなれは只情の丸ひかよいとなり先天照大神の御宮居は丸木をもて造れり 諸 の御社にも鏡をかけらるゝは丸うて空うてよろつ直に移るを見せしめ給ふなるへし我國は國津神の御國なれは春の神をむかふるにも鏡餅とて第一丸きをそ用ふなる草の餅粽なといふは有爲の色相を顯はすならん任 他花の香に馴し衣をかへし單も袷のうらぼんになればをのこ童は山寺の御兒綰折から摂待の茶筅髪にゆひなしともどちこよとて小手招くしかも明衣の廣袖を着未通女等は鬢の髪の經ぬの嶋田わけ夕風の吹返しにゆひていさをどろといふより手拍子とり足どりする十五夜の月の輪の如くにこそはおとれ小夜風に行かふ袖の移り香は浮たる戀のしるべにてしのゝ小篠のしのび〳〵にいひよりいつしか昵じき中となり末の松山さゝら波はこすともと誓ひ戯るゝあまりにあの御の方へめがゆく〳〵おめもとの入はしやらやそれをそちが報ふてなにせうぞなど左禮か實になりあは緒も今は片糸の此方彼方に引わかるゝを妹背山の中に芳野川のよしやといへど印南野のいなといふ諫むるに猶口舌たら〴〵なりければそちも斷りこちも然なりと蝋虎皮のやうにもてなすを諸共にそとほゝゑめはされはこそ思ふ中の小闘諍詞の花をちらすのみ根葉はあらじ先盃をさすか石木にあられ酒心よはくもの跡をはえ申まいしやんとさゝせられよと女かたへ戻させこれより五百八十年と祝ふを丸うなつたといひ一國一家のわれて齊ふるも又々かくいふべしまいて佛の道には丸の中に心といふ文字を書く身の一大事を觀じ知るとなれとこちやしらぬ生死山の蚣か知た生死抑心を丸うするには和歌にしくはなしときけとその樣優ならんとすれは心たらすえんなるは獺のたはれをのたはれ過つよきは片田舎のものゝ物いふに似てなつかしけなく鑽は石より堅く頭をふりあふきみれは須彌の山より高しとなれはくたれる我等の學はんには水の月を望める 獣 にとならさるへしさらは鉋をもてやまはさん小刀にてや削りなさんあらす形なき心なれはさは徒なるべしいなかにも狂歌をもてあそひね此哥久堅の天にしては下照姫に始れりしを荒鐵の地にしてすさのをの尊三十文字あまり一もしによみ給ひてそ和哥となれりけるしかはあれども人の代となりても聖徳太子樣を捨給はざりけらしいはく尺氏に西方の教へをのへ聖の道に不屑のいさめあるかごとくなるへしそれより後は文字の數和哥を移す物から猶しれたるをのみもてつゝくるとはいへと折にふれ事に望てまれ〳〵よめりしをきふき數寄者等出來て近代よりそ百首二百首數百首に及ひてはよみけるそれが中其外こゝらの人のよめるにもあまたの病を除かず上下かけあはざるおほかり狂歌とて詞こそまけてもいはめ心は正うし身を修め國を治め爰を得かしこをしるわさなれはいかて 妄 しきをよしとせん思ふに心正しからぬは他を損ひ身を亡なふ侫人にひとしく病あり上下かけあはさるは盲ひ聾ひ腰曲み足たゝすなとやうの片輪者に同しかるへけれはと和哥の 例 をもて四病八病を 禁 る中に一際いひかなへたらん哥に輕き病はゆるす方もそ有ける又昔し今に落書といふには勝れたる作もあれと

かれは世を諷し人を謗りあるましき物なれは是に載る事なし古くきゝ今見る哥にも事の情齊り笑種ならんを撰ひあつむとはすれと末巻にいたりては尺八竹の一よのみならす三世の佛の理りもあれは巫のすゝろことならねと詞こはく和歌にはいかにそきこゆるをましうる事になりぬ是おとなびたる人の爲にはあらず童べの殿のお尻からぎよの口遊を狂歌にいひかふるたよりにもとて千哥十巻なづけて古今夷曲集といふ物みな其本に還るわざなればむかしをたてる名なりけらしかくてよい春や若うならせられたと詞に花を飾りいふより本尊かけたかの鳥の聲をまち紅葉を折て簪もし酒の間をもし雪女ふらい〳〵ふる妻いとしなど戯れ春夏秋冬にいらぬ草木のえもえしれぬたはをいひてあそふもかしこき君の御惠み八嶋の外までの家〳〵の諺或は頤臍の下にさがり肩は頂の上におほりたるやうの唐の大和の異樣なる詞おさあいをあひや手打川水の阿哂和いな舟の掉頭々々土佐の手々甲大和の元興寺に隠期なとやうの事をもてつらねかいちらすをみる人きく人刮ぐるよりもをかしかり咄と笑ふに罪をうしなへばをのづから情の丸うなるべきよすがなるべし荘周かいへる菓三つ四つの跡先を誹ひ狼のをそろしき頬をなし羊の歩みの近つくをもしらぬたぐひの人は己が迷ひに情を奪はれ求むとも笑ふによしなかるべしあめにます大黒の能をきくに一に俵をふまへ二ににつこと笑ひ三に三界の福珠を袋いつはいにいれお顔の色のくろうなるまてもてありき笑ふ家には必ず來りて福をあたへ給ふ是にも三良惠美須殿お前の海の塩のめをし常にめてたいを抱ひて信ある者には給んと也是を見彼をきくに機嫌よう笑ふが即ち福徳なり菩提なる事をしれと寛文五年十月一日にしるし終りぬる行風が身のをろかなるをもわすれ後の嘲りを顧みずといへともこれを好まんものゝ爲にはいさゝかのたつぎともなるべければなにはのよしあしのふしぐ〳〵眞薦草のかりにも翫び猶形にそへる影法師のとく身をはなたすなれゆかはをかしき色の情にそみつゝ夷哥ときくに笑ふながだちともなれとなり梅といへは口に酢たまり苦參の咄しには顔をしかむるなれは十王の口澄だ□天狗のはなだかり慢ずるものも此哥をきゝもしよみもせば阿々々とこそあらずとも屈々とはいふべし現在の果にてきしかたゆくする忍をしるといへは此わざを忘れず今より終の夕までも腹たてずの正直坊笑ふのみならば情の角菱の病ひひし〳〵と癒へ眞丸になりなん後人仁といふこゝろを持藥に用ひば彼笑ひ佛とやらんにならざらめかも

古今夷曲集　巻第一

春　哥

ふるとしに春たちける日よめる　　源重秀朝臣

(0001)　年の内の春の小袖は一しほの淺黄とやせんこぞめとやせん

本哥アリ

春たちける日よみ侍りし　　行風

(0002)　山眉にかすみをひきて腰すそも優なる春の立姿哉

義綱

(0003)　立そむる霞の衣のはつれ雪春のきにける紋所かも

正長

(0004) たはこのむうちより春は來にけらし烟も霞むはなのさき哉
春のはしめの哥　哥慶

(0005) 本哥 春たつといふはかりにや大ぶくの水氣も霞て今朝はみゆらん
宜齋

(0006) ちはやふる茶筅もけさはあらたまりたつ大ふくの神の春哉
入安

(0007) 春くれは色も花香も別儀にて宿の大ふくたつ霞哉
春房

(0008) 釣棹のたけ高からん一節をこゝろにねがふ和哥夷振
一休和尚

(0009) 餅つかずしめかざりせず松たてずかゝる家にも正月はきつ
行安

(0010) きのふまで以の外にさぶ六の十八公の門の春けさ
由貞

(0011) 去年までの貧報がみこぬき捨て春きにけりな福の上下
滿永

(0012) めてたいといへはめてたいといふこそ口眞ねこまね正月の禮
次良

(0013) 臟太に雜煮をくらふ人はたゝ腹のはるにや春をしるらん
燕石

(0014) もろ人もけふ赤子にやなりぬらんむつきをしきの始と祝へは
保友

(0015) 本哥 年こえて花のかゞみとなる餅は黴かゝるをや曇るといふらん
賴智

(0016) 同 誰をかも仕手脇にせん高砂の松囃子する友あまたなり
元日の霞をよめる　如風尼

(0017) 九重もはるの霞の網の目に風たまりてやけふ長閑なり
酉年の元日によめる　行景

(0018) 水は本へ返弁申し酒の字の作りをとりの年そきにける
百首哥の中に子日　玄康

(0019) 女松をは子日の友にひかれなは陰囊なしとて笑はれやせん
霞　貞賴

(0020) 膩そうで奇麗な物は哥人の口にかゝれる山のは霞
題しらす　法心上人

(0021) 足なくて雲の走るもあやしきに何をふまへて霞立らん
百首哥の中に鶯　玄康

(0022) 法華經そ小鳥の中でうくひすは最第一の初音也けり

(0023) 錢かねでねをさすならは鶯の法々華經も一ぶ八くわん　貞頼

(0024) ほそ〴〵と鳴鶯の初音には朝とうまるも及はさりけり　行安

(0025) 梅かえはそなたのえてむ樂そうに口笛なるかやよや鶯
若菜のうた　宗俊

(0026) 籠を手にさけつかゝへつ名にめてゝ鶯菜をやつみて入らん
百首哥の中に　來焉

(0027) よもすから叩(たゝ)くは唐土の鳥ならて日本の人のくひな也けり　入安
懸想(けさう)文をよめる

(0028) いふ事をきけは腹いたむく〳〵と臍の下まてけさう文哉　貞頼
万歳をよめる

(0029) 万歳の祝ひとならは錢の數八百八十四文やれかし　不白
百首哥の中に殘雪

(0030) 年男あふて日數もたゝさるにはやくも解る雪女かな　貞頼

(0031) 巓(いたゝき)に尾(お)にまた雪のむらきえは駮毛(ぶちげ)のやうな生駒山哉　宣相

(0032) ちよこ〳〵と澤邊に殘る雪はたゝまつしら鶯がすくんだと見ゆ　來焉

(0033) 本哥 春日野はけふもなやきそよめがはぎまだ雪しるの妻にこもれる　滿永
題しらす

(0034) 春の日にかしらの雪げ落はてゝ只はげ山となるうたてさよ　志精
梅花をよみ侍りし

(0035) 色に出て見ゆる女の智惠のみか梅も諸木の花のさき也　行風
百首哥の中に梅をよめる

(0036) しう殿の秘藏(ひさう)の梅をかいだらは氣條(すはえ)の先ではなやつくへき　雄長老

(0037) 秘藏せし花を一枝こうばいの色にあか手の皮もする也　宗恒
柳のもとに梅の咲けるを見て

(0038) 春の日のたきものらしう梅か香を柳の髪にとむる風の手　行風
百首哥の中に柳

(0039) 本哥 櫻にはあらぬはるべをこきませて枝をたれたるはこ柳哉　雄長老

(0040) 俄にもあち東風と吹風の手にひきとつらるゝ柳髪哉　滿永
題しらす　久清

(0041) 春の日に蔓(はびこ)る木々の枝ごとにめはなはあれと耳無の山
百首哥の中に早蕨　淡路守宗増

(0042) 山際(ぎは)に左義(さぎ)をせし跡とめてわらびそろ〳〵もえ出にけり
春　月　一圃

(0043) 朧なは猶もあぢよきもち月とおもひつかするうす霞哉
久清

(0044) 照影も朧ぼろ〳〵ふる雨に笠をめしぬる春の月哉
百首哥の中に春雨　入安

(0045) なになりとこのめ春雨つれ〳〵と振舞はたゝとにもかくにも
雄長老

(0046) 春雨の風にしたがふかいだうのしるくなれとも早かはきけり
足にあかゝりといふ物ありて春もいへざりけれはよめる

(0047) あかがりも春は越路にかへれかし冬こそ足のうたにありとも
或人のいはく猿丸太夫か哥なり

春　草　行順

(0048) たむほゝの花のちゝつと咲比の野山はやしはおもしろひなふ
小米花　未得

(0049) それは杵(きね)是は木の根にこぼれけり小米の花の風にくたけて
沈丁花

(0050) 竹垣を霞のきぬのふせごにて匂ひをとむる沈丁花かな
花見の袖のつとふをみて　保友

(0051) 見渡せは柳櫻に都衆(本哥)だてこきまぜて行東山
題しらす　教二

(0052) 立よらは大木のかけの花見せん咲ちる程に余計(けい)ありやと
見　花　春清

(0053) 兒(こ)櫻や立て見居てみねてみても猶愛らしき花のかほばせ
一圃

(0054) をたまきのくるり〳〵とくり返しみめくりめくる花車かな
本願寺二所の庭の花を見てよめる　宗恒

(0055) 六条の染物ならぬ櫻にもおもてうらある花のいろ〳〵
芳野の花見に出たつ道にてよめる　教二

(0056) 晝食はくはすとゆかむみよしのゝ花のしたにてうへしぬるとも
名所花　保友

(0057) 櫻はな見るめについてはなれぬは芳野漆うるしのあれは也けり
行風

(0058) こつきよし色は猶よし匂よし己(い)上みよしのゝ花の勘定(かんちやう)
道明

(0059) 葛城や天狗のはなのそれならてによつと高間の嶺にみえたり　行安

(0060) いつとてもよう來たとだにおしやらぬはをしほのはなて人やあしらふ　一圃
糸櫻

(0061) わけもなく只わく〳〵とむすばれし氣も打とくる糸櫻かな
姥櫻

(0062) 見ほれてはたちもえさゝず花故に腰ぬけとなる姥櫻哉　貞頼

(0063) 白壁をつけたる宿の庭にさく花は豆腐のうば櫻かな　貞清親王
楊貴妃の名ある櫻を見て

(0064) 楊貴妃の花のかほよしさそな〳〵天のなしたる櫻色なり　滿永

(0065) 一面に咲つゝきしは春の日の長屋つくりの家さくらなり

(0066) せはしくも小枝かさなる軒口はめとはなつきな家櫻哉　三哲
花下の酒宴によめる

(0067) 塩竈の花見の酒のさかなには櫻鯛をや濱燒にせん　古生
ちいさき花の木の枝をおれるをみてよめる

(0068) 兒櫻のよろひはあれと頬當をもたでやはなのさきをきらるゝ　行風
依花恨風

(0069) ともすれは花の顔さへ打ちらす風の手くせをなをしてし哉　宗恒
題しらす

(0070) さかな舞の扇子の風もいやで□今を盛りの花み酒には　忠精
落花をよめる

(0071) 櫻花散しく庭をはきありく雪踏の皮に波そかゝれる　よみ人しらす
題しらす

(0072) 櫃川のはたに生たるかは櫻ちるもそ花のとぢめなりける　重頼
岡部氏内膳正館にて鯛の料理ありけるに

(0073) 本哥 鴈の汁きくの酒のむ秋はあれと春の海邊に濱燒の鯛　藤原言總卿
櫻鯛

(0074) 上下にもてはやしつゝ味ふや花も實もあるさくら鯛とて　正繼
近江鮒

(0075) さゝ波やしかからし酢てくふ時はたれが口にもあふみ鮒哉　淨久
題しらす

(0076) 本哥 丹波山□栗にじる秋はあれと住吉浦の春のはまくり　宗朋
歸鴈

(0077) たはけとも中〳〵いはじ明るよの花を見捨て歸るがんかり　行安

(0078) 名殘おしく思ひまいらせ□可(べく)をかなに書ても歸るかりかね
教二

(0079) 歸る間に古郷の花の散たらはあちらこちらですつかりそせん
百首哥の中に春駒
玄康

(0080) 乘とめてすそもしてまし春駒のへうたんからや井手の玉川
苗代
貞頼

(0081) みな口をよく〳〵まつれ秋くれは人の命をつなぐ苗代
蛙
滿永

(0082) 水にすむ蛙が哥をよくきけはとかく卑下(ひげ)なり愚意(ぐい)〳〵といふ
未得

(0083) くちなはのをふてからめて取まけはかはつ軍のにげ道もなし
遠江守源經行

(0084) 苗代をおとせる水に落ゆくは軍に下手のかはつなるへし
百首哥の中に杜若
雄長老

(0085) 水てとくにかはのあやめかきつはたにたりや似たりとにためきにけり
躑躅
未得

(0086) 咲花の顔は上戸の色なから名は下戸のすく餅つゝし哉
款冬
藤原秀直朝臣

(0087) 咲出し八重山吹のまつ黄なる色も甲州一歩なりけり
題しらす
重安

(0088) 本哥 やかすとも草の餅をは春日野の春なくさみにもたせたらなん
三月三日
行榮

(0089) 臼(うす)に粉も蓬も入て杵(きね)をとりつく音も先がたひしの餅
行風

(0090) 御祝ひによりき家の子集りてつく也くふなりどさくさの餅
一圃

(0091) 酌人のこほるゝばかりもるにこそはや置給へもゝ桃の酒
題しらす
宗恒

(0092) 本哥 鮎の子のわきてなかるゝ泉川いつみ酢にての料理床しき
百首哥の中に藤花
入安

(0093) 大臣のゆかりの色か紫の藤浪ながき花のふさゞき
雄長老

(0094) まとひつゝ藤にしたゝかしめられて難儀そうなる松ふぐり哉
貞頼

(0095) 紫のふどしに似たりふぢの花松のふくりを咲てつゝめは
淨久

(0096) 見るに日は西にねちれど藤花じきになるやらひたるさもなし

池邊の藤を月出るまてなかめをりて　友以

(0097) 池水にひかめく月はしら藤の棚から落てぬれ鼠哉

暮春　重故

(0098) 春は猶ゆるりくわんすのせんじ茶のにへ花をのみ遊ひくらせり

百首哥の中に三月盡　玄康

(0099) 三春の約束よとて來りしもけふつきてこそ歸るなりけれ

(0100) 春の日は長鑓なからさゝのはの一よはかりになれる石築（いしづき）　雄長老

(0101) くど〳〵とするまに春はつき弓の矢をいるやうに日は立ちにけり　淡路守宗増

古今夷曲集　巻第二

夏　哥

百首哥の中に更衣　入安

(0102) ぬぎて今日かへす〳〵もはつかしや花みる程の借衣（かりきぬ）の袖　雄長老

(0103) めをと中に只二つもつころもをはかへあひて今日の筈（はつ）やあはせん

卯花　貞徳

(0104) 月出るその方角（はうがく）も卯花の東しらみに夜は明にけり

(0105) 卯花はどこからふれる白雪と空に不審の雲や立らん

葵　保友

(0106) ふかぐ〳〵と葵の上に置露や御息所（みやすどころ）のなみたなるらん

待郭公　休和

(0107) こなたより御本尊かけて申へしうそにはまたぬやよ時鳥

(0108) 明暮やあらをそしとてまつの戸にほとゝきすにてすねてこぬかも　淡路守宗増

(0109) 郭公えきかでやあら卯花のしらりと夜をそ待あかしぬる　宗鋪

(0110) 時鳥口なしはらの名におひてなかぬやじやうのこわた山邊　浄久

聞子規

(0111) ひとりゐによつほとゝきすをとつれの聲聞時そ気は散しける　浄治

(0112) やるまいぞやるまいものを時鳥きいたか〳〵今の一こゑ

(0113) 郭公笹根うつぎに鳴こゑを聞て忘れぬ地獄耳哉
愛宕の坂にて馬の沓をみれは福なるよし人の語る折しも時鳥の鳴けれは
一　幸

(0114) 耳のびくよきはあたごに一聲を聞ぬる馬の沓手鳥哉
梢に蝉の鳴折しも時鳥を聞て
満　永

(0115) 蜀魂空に本尊をかけたれは蝉の経をも猶高うよめ
百首哥の中に廬橘
雄長老

(0116) 禁庭の花さへ木さへ見えね共風薫りくる橘か圖司
貞　徳

(0117) 陳皮にはならぬさきより立花の匂ひを聞そ気藥なる
早　苗
宗　増

(0118) 早乙めの骨を折つゝうへ〳〵の地頭へ米はとるさなへ哉
五月五日珍客來れるに粽を出して挨拶に
行　安

(0119) 今日ことにきこしめされよ御壽命の數もやちたひもゝちまきをば
久　清

(0120) 印地にし深入しつゝ深手をば屓はふかくな深草の者
五月五日雨降ければ
左衛門督　藤原義景

(0121) 風の手の礫のやうに打ちらす雨こそ今日の□印地なれ
笋をよめる
久　清

(0122) 竹の子や疱瘡するとかろからん絶す雀の羽風あつれは
五月雨
満　永

(0123) 五月雨に降こめられてきかくさりかしらいたやの煩ひとなる
照　射
貞　徳

(0124) 的よりもともしの影に□むで行鹿子の星やいにくかるらん
百首哥の中に蛍
玄　康

(0125) 猿の尻はまつかいなれは蛍火も昔よりかう有そしつらん
入　安

(0126) 若衆を思ひのたまかほたる火のむねはこかれで尻そこかるゝ
宗　増

(0127) 白露の玉藻の前が亡魂か蛍も身より光りはなてり
法橋由己

(0128) やどをかといはぬ斗そ飛ほたるよるにしなれは是も火尻は
高野にてよめる
成　安

(0129) 火て□かいや火にあらず高野山谷みつこえて蛍飛也
蝉
春　房

(0130) 帆柱に是も見よとや船岡の山の梢にせみが取つく
鮎　鱠
満　永

(0131) 作りしも河の瀬ごしの鮎なれは生酢(なます)をもまたあさらにそもる
鮎料理の座にてかゝる鮨もかなといふ人のあるを聞て
是急

(0132) 本哥アリ 鮎くての後の心にくらぶれは昔は鮨も思はさりけり
題しらす
教二

(0133) 苅人もはこびし人もつく人もふどしのみなるはたか麦哉
夏草花

(0134) 結句そちに人くさいとやかぎぬらん香をかぎよりし鬼百合(おにゆり)の花
淨治

(0135) 本哥アリ 名にめでゝおらぬ斗ぞ鬼茴(あざみ)我におちにきと人にかたるな
行風

(0136) 野にたてり夜風ひきてや撫子のはなたれたりとみゆる朝露
正信

(0137) 枯さうな富士撫子をそだてむと水汲かくるたごのうらが身
下野國奈須野にてよめる
知度

(0138) 風の手もさへなをそろし所からあたをなすのゝ石の竹にや
題しらす
西行上人

(0139) 撫子のませにぞはへるあこだふり同しつらなる名をしたひつゝ
瓜作れる人の挨拶に
高壽

(0140) 名をしたひこむせつぶりの雨露か梵天瓜ぞようそたつなる
姫瓜
未得

(0141) ねぢつけていざやちぎらんをのれとはまだおちそうもなき小姫瓜
題しらす
宗鋪

(0142) あさ瓜をはやしてくへは喉笛もひやり〳〵となりにける哉
茄子
みとく

(0143) をのづからなすびの色を紫のふくさにつゝむ茶入とぞみる
読人しらす

(0144) 本哥 などて角はやとしよりになりに釼水なすひぞとむしりしものを
玖也

(0145) なからへて何をなすひの畑に生ふる若きをこそは人もちきらめ
津國今宮わたりに干瓢といへるものを老若わかたすこしらへけるを見て
利忠

(0146) 本哥アリ 春植て夏むきけらし白妙のかんへうほすなり尼もかゝらも
蚤
道明

(0147) 身も皮もほりぬくやうにいたむるは是や大苦ののみの虫なる

題しらす　宗恒

(0148) 本哥 蚤よりも蚊こそうたてくおもはゆれたれか破りし此紙帳そも
蚊　宗朋

(0149) 罪あるもあらぬ人をもいきながら鬼はかほとによもやくふへき
題しらす　一根

(0150) 本哥 我きても久しくやれぬ帷子は姫かよみをやおほくいれけん

(0151) 本哥 こい捨う我帷子の水いろはひとしほとこそ思ひそめしに
津國福嶋に雀鮨といふ其所の名物なりけるをよめる　久清

(0152) 數おほふ江鮒のうろこ福嶋の人は仕馴(しなれ)てよい雀鮨　親之

(0153) 青たてもそへてはなさん羽なくて飛程むまき雀すしとは
祇園會　宗鋪

(0154) 精舍には諸行無常となるかねのしやぎりしきりにかはる祇園會　未得

(0155) ひいてくるとみれは過行山鉾よ是や祇園の會者定離なる
炎天　行風

(0156) 寒(かん)よりも百倍あつき炎天は身にきる物のわたくしでなし　是急

(0157) 夏の日の暑気(あつけ)をはらふいづみこそ手に結ふてふ水の印なれ
泉　みとく

(0158) 賣ためて錢口おほく結ふべし是ほど酒がいつみなりせは
題しらす　貞徳

(0159) 座頭衆すゞみとなれは酒盛のてうしを請て平家かたれり
百首哥の中に　淡路守宗増

(0160) しつのめも大路(おほぢ)井筒に夕涼みふるかたびらの汗あらひして
蓮　前大僧正慈圓

(0161) 花瓶にもさすてふ花と聞しよりはちすをみればうそゞふかるゝ
荒和秡　むねます

(0162) あまかへる蓮華にひよつとのつたれは生佛とや是もいはまし　種好

(0163) 貧報の神もなこむや借錢は今日みな月のみそかはらへに　未得

(0164) 來る秋と夏は過行さかひのまん中臣の祓するなり　淡路守宗増

古今夷曲集　巻第三

秋　哥

百首哥の中に秋たつ心を

(0165) 涼しさを巻籠てくる文月は一葉の風のちらし書なり　貞徳

(0166) 秋きぬとめには見えねとひく風のしはぶく聲におとろかれぬる（本哥）　入安

七夕

(0167) 盆またて聖霊まつるたなばたにむくる時宗の尼の川水　雄長老

初秋月

(0168) 御簾（みす）ごしにながめ□□は只文月の透写（すき）しなり　行風

猫のため盂蘭盆会まうける人をみてよめる

(0169) 猫脚（ねこあし）のぼんたてにする功徳茶の哀れになぐるくび玉まつり　休甫

踊

(0170) 両の手をふりつゝ拍子打時はあふきを腰にさしをとり哉　久清

(0171) 出たちはどれもあさ衣あさ〳〵と浅黄にそめてきそ踊哉　行風

(0172) 見るにきくにほど拍子よやふりのよや哥も上手や小町をとりの　源雅純朝臣

(0173) かけられてあふむがへしにきたるこそ小町踊の哥のさまなれ　未得

(0174) はやしぬる踊の庭に燈籠をともして持もこきり子ぞかし　近吉

をとりの拍子そろはすとて見る人わろ口いふによめる

(0175) わる口をあしきをとりにいふことは先笛吹におひやひつこめ　ていとく

津國福嶋と云所にて踊にをのこも女も群集するをみて

(0176) 秋風の福嶋人のをどるとて雀鮨ほと集りにけり　行安

相撲

(0177) 笑種（本哥）とばにかゝるまけ相撲たま〳〵出ては手をもえとらす　器音

相撲にまけぬる方いなひけるをみてよめる

(0178) かつにのり手とるに足をとられつゝ肩ぬる方ややすまふといふ　みつなか

百首哥の中に女郎花

(0179) 秋の野に露おもくさの女郎花色はにきびか粟のむせるか　入安

(0180) 色をみなへしてとはねと飯にむす粟粒（あはつぶ）ほとも替らさりけり　休甫

百首哥の中に薄　雄長老

(0181) まねきよせて化(はか)さんとてや秋の野にふれる狐の尾花なるらん　ていとく

(0182) 落武者のをづるも道理薄の穂(ほ)いり日を招く鉾に似たれは
薄を吃(どもり)詞にてよめる　よみ人しらず

(0183) 秋の野にかゝ風ふけるたゝたびにたゝたれ招くはゝ初尾花
百首哥の中に蘭　貞　徳

(0184) くさきぼと匂へは是や申らんしまにんにくの蘭とも　雄長老

(0185) 藤袴もゝたち活(くはつ)ととりもせですそ野をくだり露にぬれつゝ
槿

(0186) 花の露も日影うつれは蛭(ひる)に塩ひるはしほ〳〵となれる朝□　玄　康

(0187) 朝酒をおほく呑なはくるゝまて只是槿花一日の酔
色　鳥　少将藤原秀宗

(0188) 渡り來る數も限らす一つれに二十卅四十からかな
題しらす　保　友

(0189) よりあひて山から日から四十からから〳〵〳〵と笑ふみゝつく
夜更て鶉の鳴けるをきゝてよめる　権大僧都心敬

(0190) 秋の夜のくわいとふけつゝふけりしは夢か現かうつらにて□
鴫　未　得

(0191) 羽がきの數を所作にやむは鴫の看經(かんきん)をする暁の聲
百首哥の中に松虫　法橋由己

(0192) 墓原(本哥)に人まつ虫の聲す也我かと行てとふこともいや　ていとく

(0193) たぎらする茶の湯の廬路(ろち)の下草にりん〳〵と鳴松虫の聲　淨　治

(0194) 草村にむさとな鳴そ轡虫野飼の馬のはむ事もあり　やすとも

(0195) 鷹犬の鈴虫馬の轡むし鳴野や殿の狩場なるらん
月　行　風

(0196) 月にあそへ五尺にあまる身なり共一寸先は闇の憂世ぞ　よみ人しらす

(0197) 腰もとへ似たり金鍔(きんつは)さし出て山のはすはに見ゆる月哉　友　知

(0198) 大空をよありきしつゝあかせるは月の桂の男さかりか　未　得

(0199) まはらなる軒の穴より詠れは月の鼠も桁走(けたはし)るなり
長　尊

(0200) 三味線の音をおもへとも風の手にくもはちりてれてれる月影
月のもとの酒宴　三　政

(0201) 世捨人かいや夜はすてず月のもとの酒に心がうき藏司なり
対月明莫往事思と云詩の心をよめる　藤原氏成卿

(0202) 詠れは顔のゑくぼそ皺(しは)となる月の鼠がしほを引かよ
月の夜目医師のもとにてよめる　元　安

(0203) ねぶたけもさすがにさめてよしみねや只めくすりは秋の夜の月
月を奴子詞にてよめる　よみ人しらす

(0204) 片脇へつとそびけろうみたくないに邪魔(じやま)入申す月の村雲
名所芋　貞清親王

(0205) 本哥 山城の美豆(みつ)野の里の芋をほりていくたひ淀に賣ありくらん
あまたともなひて或寺にまかりけるに手作なりとて山芋料理せられけるに
よめる　宗順法師

(0206) 本哥 くてのみや人にかたらん山のいも手毎にほりて家つとにせん
駒　迎　未　得

(0207) 信濃より木曾踊して引駒のまきぬる髪も茶筅やこのさ
参議大江秀元

(0208) 本哥 相坂の關の清水をかいすぎは風をやひかむ望月の駒
題しらす　貞　因

(0209) そひあきし妹とはかはり見る度にものくさからぬこ望月哉
淨　久

(0210) 望月を汝(なじ)が箸(はし)にかけんとやほつかり口をあきのよの空
八月十五夜　元　安

(0211) 村雲のたちまちきれてさやかなる秋の中ごのめいよなる月
行　安

(0212) 詠めやる三五の月の光りには二千里欲も忘れ果たり
名月の夜畑なる芋ぬすめるをとらへけれはぬす人のよめる

(0213) 月見よといもか子とものねいりたを起(をこ)しにきたは何かくるしき
河内國壺井と云所にて月を詠めをりてよめる　元　安

(0214) 唐臼や壺井の中へかきいれてたれ水とりの望月の影
八月十七夜八宮御所にて当座に月の和哥よまさせ給ひ三木たまふ折から今
宵の月を題にえひす哥をとおほせけれはよみて奉り侍りし
行　風

(0215) 望月の鼠がわれとかぶるやらよへからちゝとはたのへり行
廿日月　未　得

(0216) 詠れは廿日鼠のをのづから今□の月のなりぞちいさき
百首哥の中に霧　雄長老

(0217) 朝霧のきりの籬のかきのもとをとをり行人まるぬれにして
秋　田　利　忠

(0218) 本哥 秋の田をかるこにてもつ稲をもみ我きる物は汗にぬれつゝ
久　清

(0219) 苅稲を菩薩といへはそれを屓牛も大日如來なるへし
一　幸

(0220) 本哥 百姓の稲こなすとてする臼の音聞時そ秋はかしまし
百首哥の中に擣衣　入　安

(0221) 露木葉きぬたの音もはら〳〵とたれ秋風におびえうつらん
貞　徳

(0222) 槌の柄をしとゝにぎりて故郷にうつは男をこひころも哉
玄　康

(0223) 寺のうちにきぬたの音の聞ゆるは彼大黒のうつ槌やらん
百首哥の中に菊　淡路守宗増

(0224) 壁に耳岩の物いふ事あれはなにをかきくの花もはつかし
入　安

(0225) 翁草花さく比は露はらひたえすとふたり常にとひたり
菊を愛する人のもとにて　元　安

(0226) 家主のよはひの程はちとせとの菊のまがきをゆいて見まらせよ
九月九日に　種　好

(0227) 君か代にすんでとくりの菊の酒くめは珍重陽てうれしき
正　定

(0228) 本哥 いにしへのならのみやけの菊の酒けふ九日のいはゐにそのむ
一　笑

(0229) 開かさる菊のこゝろも節供ぞといはんしたばのつほみ口哉
十三夜　白譽上人

(0230) めのさやも大豆のさたをもはづしつゝ見くふそ月を賞翫のかけ
同じ夜曇りけれは　玄　貞

(0231) 揃大豆のさやけき月のかけをとて人の口べにかゝる村雲
紅　葉　三　政

(0232) 立田山横すちかへもをしなへて只一しきにもみちしてけり
東福寺にて　保　友

(0233) 通天のもみちの色を兆殿司書移しぬる繪の具とやみん

みとく

(0234) 本哥
やよ時雨猶うはぬりをたのむそやまだ色薄き漆紅葉に
百首哥の中に　雄長老

(0235) 朱をまぜて漆ぬるでの紅葉はも先秋風にまけて散らん
菓　未得

(0236) けあげたる鞠のごとくにぶらめきて庭の梢にありやありのみ
梢の柿人のとりくふをみて　元安

(0237) ほの〳〵とあかみのつひた筆柿をもつ人丸でかふりこそすれ
九月盡　未得

(0238) 長月もつまり〳〵て一寸の光陰おしき今日の晦日
百首哥の中に潤九月盡　淡路守宗増

(0239) 花をみて他念なけれは積善(しやくぜん)の餘慶(よけい)の秋もつくる菊月

古今夷曲集　巻第四

冬　哥

百首哥の中に初冬　淡路守宗増

(0240) 昨日今日あらさむやとて重ねきる小袖そ冬の始なりける

題しらす　貞徳

(0241) 冬籠る垣ゆいつけん高屏の蛛手かくなは十月になる

貧報の神も出雲へ行ならは十月ことに我は福人　雄長老

(0242)

本哥
村雨も時雨もいたくもるやねはしたや殘らす水つきにけり
口切の茶の湯をよめる　常林

(0243)

霰釜しかくる爐にはをのつから置ぬる炭も冬のいろ哉
題しらす　久清

(0244)

名におひて數寄する人は無地ならぬかたつきの茶の小袖きにけり
亥の子餅に砂糖かけたるをみてよめる　勝可

(0245)

ゐのこにしかのこまたらのあかの餅白きをみれは砂糖なりけり
冬　柳　淨治

(0246)

朽葉さへちつとも見えぬ姥柳楊枝にせずと杖にきれかし
寒　蘆　未得

(0247)

人ならは脚氣(かつけ)といはん霜かれにおれふすあしの節もかなはす
題しらす　入安

(0248)

身をつくしなにはの事もはたらけは足もとさむく日〳〵にあれ行
寒夜によめる　宗也

(0249)

(0250) 寒き夜はいかなる哥もよみつべしあまりかゞめは人丸になる
氷　忠昌

(0251) 今朝最早(もはや)とづ坂本のあつこほり山のひえたる夜風故かも
河氷　久清

(0252) わすれては白き氷を砂糖かと思ひて口になめり川かな
百首哥の中に　入安

(0253) 水うみの上こと〳〵くはりにけり是や近江の二十四こほり
千鳥　ていとく

(0254) 風次第あなたこなたに立さわぎ波の音さへちとりがけ哉
雄長老

(0255) 餌(ゑ)さしめがちやくとさすべき棹河の不用心にも鳴衙(ちとり)哉
むねます

(0256) ちり〳〵やちり〳〵にもやとむで行はんま衙の友をよふ聲
鷹狩　雄長老

(0257) 攝家(せつけ)まで供奉(くぶ)する君か御狩場にすへて出たる鷹司殿
一頼

(0258) 鷹の鈴からりともいふ音きかは鷺の身の毛もよたつなるらん
みとく

(0259) 名のみして膳にはすへぬ箸鷹のとりえぬるよりはやつかみぐひ
或館にて鷹の鳥の料理給ひけるによめる　正信

(0260) 鷹にとられ殿の御汁になる時はたうべる人の身も煖(ぬくめ)鳥
百首哥の中に夜霰　入安

(0261) さら〳〵にあられん物かあられふるさゝの一よもさゝを呑すは
山雪　淡路守宗増

(0262) 雪になる雲をぼうしに打かぶりかしらもさぞな大びえの山
尊純法親王

(0263) 北山のかしらにかぶる雪綿や寒(かん)もて寒をふせぐなるへし
藤原親綱卿

(0264) 草木も成佛せんと衾雪(ふすま)かぶる座禅の床の山かな
奈良にて雪の降ける日よめる　行風

(0265) 舍利ならぬ雪佛もぞはくしきにひからかすがの御作なるへし
法印玄以

(0266) 春日野の帷子雪はところからならざらしともいふべかりけり
松雪をみて　智仁親王

(0267) 松かえのかたびら雪のましろさは十八かうのさらしなりけり
百首哥の中に　玄康

(0268) 天神の御自愛なれは松にふる雪のしら太夫と是も云へし

題しらす　　來　焉

(0269) 三密の月くらきよは十丈もつもれ九識の窓の白雪
百首哥の中に炭竈　　入　安

(0270) 小野の奥雪ふみわけてかまもとのすみをねきれは結句これたか
百姓の身におはさるおこりをなし公納米不足してけるをみてよめる
中納言大江輝元

(0271) 秋の田のかり米をなし奢りなし年貢にわらや出す百姓
いろりぬるをみてよめる　　貞　徳

(0272) 田樂をあふらん爲のいろりとて先なまかべを付にける哉
火　桶　　未　得

(0273) 抱てねて寒さをふせく火桶こそかさねぬ夜着の妻とそふらめ
光　知

(0274) あたるまの久しき程に炭の火もぜうとなりてや足のひゆらん
冬　梅　　みとく

(0275) 雪の中にまつぬけ出て咲花は梅のこたちた鞘ばしるらん
西京八宮御所にて年のうちに春立て又の日大雪降けれは当座の和哥よみて
奉りしに四方を詞に雪の狂歌をもとおほせけれはかく申上侍りし
行　風

(0276) ひかしより春はきたのに西の京興ある今日の雪そみなみよ
元　行

(0277) 東より春きた後も西の京狂哥に今日の雪の色そふ
百首哥の中に歳暮　　入　安

(0278) 借ちらす木葉にあらぬ錢米の味進も今日はくるゝ年哉
歳　暮　　恒　貞

(0279) 臆病と人はいふとも求めたしおいくる年ににげん脇道
讀人しらす

(0280) 酒のまず餅をもつかぬ身ともには年の一つも御免あれかし
長嘯子

(0281) いにさまに置みやけとて眉の霜かしらの雪をくるゝ年哉
尊朝法親王

(0282) 年の矢のかぶらもたけて春はたゝ障子一への隔てなりけり
南　哥

(0283) 今日毎に嘉例はづさで一つつゝ老をもてきてくるゝとし哉
坂東の俗除夜にいり大豆こしらへる時やらくさやふんといへることはをも
てよめる　　卜　養

(0284) 鬼は外福は内へとうつ大豆のあたりてひるかやらくさやふん
百首哥の中に除夜　　雄長老

(0285) 鬼は内へ福をはそとへいだすとも年のひとつもよらせずもかな

古今夷曲集　巻第五

賀　付神祇

元日祝　　行風

(0286) 二本づゝ日本の門の松竹は千年を千代の證據にやたつ

(0287) 書初をすゞりの水に鳰海はつかひほすとも君が代の春　　應其上人

正月三日祝の心をよめる

(0288) 三ヶ月のかげますように明日よりは猶よからふといはふ春哉　　貞徳

祝ひの哥

(0289) 幾秋もかさね土器（かはらけ）手にとりて汲ともつきじ菊の酒壺　　利清

節分によめる

(0290) 君か代に上下万民もてはやす大豆や千年の數に節分　　道僖

祝　哥

(0291) 須彌ほとに積（つみ）をく芥子（けし）を君か代の千代に一つの數取にせん　　來焉

(0292) 君か代はいく千代鶴の羽はゝきてなつともつきぬ茶臼なるらん（本哥アリ）　　器音

(0293) 道にいる末繁昌のかたみには藤氏源氏の家をみてしれ　　雲居和尚

神祇

此集あみ侍るなかはにいつくよりともしらす白衣のおのこのきて此哥も集にくはへ給ひねといふいつかたよりと問侍るに我は鹿嶋のものなりこの御哥は明神此比の御神詫なりといひすてゝさり侍りぬ

(0294) 霜柱氷のはりの雪のさす雨のたる木の露の草ふき　　宗恒

夢想の發句をひらくへき心侍りける折柄によめる

(0295) 願くは花のもとにて連哥せん其二月の天神の日に（本哥）　　久清

神子の化粧して神樂にたちまふを見て

(0296) 山崎やせんげんたりし両鬢を油にひたす八幡の神子　　來焉

月次の會にて

(0297) 祈る也若衆にはあらす和哥の道に冥加のあらせ玉津嶋姫　　一圃

題しらす

(0298) めでたいに酒くむ人のにこ〳〵と笑ふ家には利をゑひす講　　元理

丹波杵の宮にて

(0299) つく事を守らせ給へきねの宮米はもたすと連哥なりとも　　法印玄旨

ひちう吉備津宮にてよめる

(0300) 神はきねがならはしなれは先つきて團子にしたききびつ宮哉
題しらす　器音

(0301) あふみなるつくま祭の夜宮には物うりさへやかづくなへせん（本哥）
筑紫安樂寺にてよめる　友知

(0302) おほしめす所へひとつと飛梅は誠に自由自在天神
題しらす　路春

(0303) 善光寺それにはあらすめくる日の牛にひかれて参る天神
百首哥の中に　入安

(0304) 烏帽子きて神の御前にひだりをり右をりしつゝ見ゆるはふりこ
題しらす　徳元

(0305) 千早振神につかへてあらよねのこぼれを拾ふつゝをねぎ哉
心あきらかならん事を神に祈りてよめる　正定

(0306) 正直の神のちかひのかの字にし濁りをさいた身を祈るなり
氏神の祭りの日三寸（き）いたゝくとてよめる　滿永

(0307) 信あれは徳利にいるゝ此三木をいたゝく度に手もあらひよね
題しらす

(0308) なまぐさき戀をもいのる神なれは御前てとるもみくじらぞかし
百首哥のなかに　平時頼朝臣

(0309) 神まいりするとも心あくならは利生はなくて罰やあたらん

古今夷曲集　巻第六

離別　付　羈旅

本けこなりし者今は宮の御方につかへ侍るか御所の御供して江戸へまかるといふむまのはなむけに　信海

(0310) さる間下らせ給ふお江戸にて仕合もよくのほれ助四郎
小濱氏なにかし江戸へまかられけるに足袋五足送るにそへて　言當

(0311) 東路へくたらせらるゞ此たひはごそくさいにてやがて御上り
うとからぬ人の他國にまかるによめる　休甫

(0312) 鐵鉋の玉きはるまて悲しきははなしゝ人をはなしやる旅
出雲と讃岐へ使僧遣す門出に　信海

(0313) 機嫌よく旅にいつもの門出にさすかに祝ふ酒のさんしう
芳野の者今年え方なれはとて安藝宮嶋へ賣買にまかりける餞別に　恒貞

(0314) 出たらばさそな仕合よしのよりことしは方もあきの宮しま

羈旅

題しらす　西行上人

(0315) 七瀬川やせたる馬に水かへば九勢になるとてとをせとそいふ　未得

(0316) 山城の木幡の里に馬はかせと駄賃なき身はかちにてそゆく　本哥
題しらす　弘重

(0317) 家もなき山路もてこしやき食にきるゝ命をむすひとめすや　東のかたへ出たつ馬上にてよめる　近吉

(0318) 相坂の關の清水で茶屋のかゝいまやかすらん餅につく米　本哥
松本にてよめる　徳元

(0319) 旅人の足手かけをしまつもとの茶屋も千年とちきる餅哉　石邊にてよめる　友以

(0320) 里の名のいしべをひるはくさつなる姥かもちゐの過し人かも　熱田にて　正成

(0321) 舟の上えはぬほどしものむ酒の間もあつたの浦に付ぬる　尾張のさかいはしにて　藤原光廣卿

(0322) 打わたす尾張の國のさかひばし是やにかはの繼めなるらん　赤坂にて　保友

(0323) 出女か紅まへたれの赤坂のあかぬ姿にとまる旅人　古郷の者文使に通るに途中にてゆきあひてよめる　正成

(0324) 東より文箱もちて通る身に逢て嬉しきふた河の宿　荒井前坂にて

(0325) 波のあらい舟路なんなくこす上は只何事も思ふまい坂　袋井の宿にて大雨の降ければ　信海

(0326) とゆ合羽ひつはるさめの籠なれは番袋居の心地こそすれ　保友

(0327) 行末も遠江路の旅刀す袋井をやかけ川の宿　佐夜中山にて　讀ひとしらす

(0328) 旅衣たちよる寺に茶はなうてのみてこそゆけさゆの中山　宇津山にて　未得

(0329) 乗懸のつゝらおりしてつかれたる馬には沓をうつの山こえ　飛鳥井殿鞠子宿通り給ひける跡よりゆく折しも馬の沓もとむるにねの高きなと下部とものいふを聞て　法印玄旨

(0330) 鞠子川くつ音高く聞ゆるにあすかいたまへさきにあり〳〵　同じ河に大水出しを越るとてよめる　哥慶

(0331) 大水に渡るかゝりはのべあしやえもんながしの鞠子川かな　みとく

(0332) 馬の足四本がゝりによるなみの沓音たかくこす鞠子川

百首哥の中に　　玄　康

(0333) 暮かゝり鞠子にやとのありけれは早く留りてくつろぎやせん
題しらす　　讀人しらす

(0334) あなきたな江尻を出て行人の足からくだりかゝるはこねぢ
親しらす子しらすといふ所にてよめる　　宗　易

(0335) 親しらす子しらすなれとこゝにても留守する妹か事をのみこそ
由井蒲原にてよめる　　正　成

(0336) のる駒ののみをゆひて行〳〵もなづまでぞよきかむ原の道
山中にてよめる　　徳　元

(0337) 本哥 どちこ地のたつきもしらぬ山中におほつかなくもよぶ茶やのかゝ
かたひらの宿にて雨の降日よめる　　讀ひとしらす

(0338) しるき道行來の人のすそみれは皆どろそめの肩衡の宿
江戸に著てよめる　　とくけん

(0339) 本哥 京と江戸両道かくる武藏あぶみさすか駄賃はのるもうるさし
熊谷宿にて破旅籠くふとてよめる　　讀人不知

(0340) 燒(たき)立るはたこの飯のあつもりを手にかけてくふ熊谷の宿
片瀬腰越懐嶋(かたせこしこゑふところしま)といふ所を通るとて

(0341) かたせよりこしごえとをる旅虱懐嶋やとまりなるらん
或座頭關東より上りに上戸か原といふ所にとまりしをいたはれる大名より
酒にそへ給へる哥

(0342) 本哥 行暮て上戸かはらを宿とせは酒やこよひのあるしならまし
木曾路はつは坂と云所にて客僧にあひ暫くかたりて年はいくつと尋ねける
に六十四といへりけれは　　宗　也

(0343) 客僧の年はととへは六十四はつは坂とは九々にあひたり
伊勢路つゝら町といふ所にて　　ちかよし

(0344) しんこ馬に付たる荷さへ名におふやねぢたる藤のつゝら町とは
へそ村といふ所にて

(0345) 賤のめかつむける糸によりてとへは所の名さへへそ村といふ
くほ田と云所にて雨のふるによめる

(0346) 雨ふりの夜道をゆかは旅人のふみかぶるべきくぼたまり水
沓懸にて

(0347) 茂りたる庭の柳もかゝりよしと立とまりける沓かけの茶や
伊勢桑名の邊ほし川あさけ日なかといふ三ヶ村をよめる
西行上人

(0348) 桑名よりくはで來れはほし川の朝けは過て日ながにそ思ふ
旅の哥　　宣　相

(0349) 足引の山こえかぬるひるとばにしんこ馬こそ床しかるけれ

百首哥の中に　雄長老

(0350) 草枕飯をはもたで椎の葉をすくひ物にそしたる麥の粉
世のことはさにより思はすひなに年をへけるに古郷を思い出て
行　安

(0351) 赤子もそ今はかぶりをふる里にあはれあわゝや手打するらし
百首哥の中に　入　安

(0352) 今は只もゝもこぶらもはりまがたしかまのかちの旅の苦勞さ
西國へまかりたつ日難波堀江をこき出るよりまほにてとも舟のならひ行折
によみ侍りし　行　風

(0353) 帆をかけてひいふうみつの浦風に走りこぐらや足はやき舟
海路旅の心を　淡路守宗増

(0354) 雲霧もはれものなればうみわたる時分をみてぞをし出す舟
舟中にて雨にあひて　宗　也

(0355) あめざやの刀の小尻ぬらさんと苦をくゞりて舟よばひする
西國にまかり下りけるによこ波しきりにて人々舟にゑゝりしによめる

(0356) 皆人の舟にゑいたといふ事はさかしほ風のふけはなりけり
室の湊につきてよめる　宗　因

(0357) 一〳〵にをしならべたる友舟の十艘室のとまりにぞつく
但馬と因幡との境ゑぐみといふ所に雨留りしけりいと狭き家なりけれはよ
める　法印玄旨

(0358) 主從者たびにしあれは里の名の居ぐみにしたるかりの宿哉
香椎の浦よりかへるさに舟を遙なる干潟のさきをまはさせて多々良濱を歩
み行とてよめる

(0359) いにしへは爰にいもじの跡とめて今も踏みるたゝら濱哉
題しらす　貞　徳

(0360) 思ふ子に旅をさせよといふ事はわがしてしらぬ親の詞か